

はじめに

今回私がこの本を執筆することになったのは、3人の子どもたちが同じようにハーバードの大学院を卒業したと聞いた編集者の方が、どういう教育をしてきたのかと興味をもたれたことがきっかけでした。

昨今では、テレビ番組でも子どももの教育に関する番組が増えてきているように思います。

そうした番組によると、インド式教育を行っている国内の外国人学校に子どもを通わせたり、小さいときから英会話を学ばせる親御さんが増えてきているそうです。

このように、子どもが小さなころから将来のことを考えた教育を受けさせてあげることは、とても良いことだと思います。

しかし一方で、そのような教育をしなかったからといって、ハイレベルな高校、大

学に行けないかという、そんなことはありません。

私の子どもたちが卒業したハーバードの大学院といえば、それなりにハイレベルな学校です。

だからといって、私が子どもが小さいころからずっとハイレベルな教育を受けさせてきたかといえば、そうではないのです。

子どもが小さいころからキチツと管理し、親の望む教育を与えるのとは逆の、どちらかという放任に近い教育をしました。

放任と言うと聞こえが悪いかもしれませんが、すべてを放ったらかしで「なるようになるだろう」というのとは違います。

何をどうしたいのか、肝心なところでの意思決定は子ども自身に任せる一方で、子どもたちが目標を見つけ、チャレンジするようになるところまでは積極的に関わるようにしたのです。

そのとき親がしてあげられることは、子どもが挑戦したいという気持ちになるように接してあげること、愛情を注いであげること、そして、子どもが何の心配もせず目

標に向かってがんばれる環境をつくってあげることです。

どの家庭にもそれぞれ違う環境や、限られた生活事情などもあるかと思いますが、昨今では、教育に限って言えば、チャンスは比較的公平に与えられているように思います。育つ環境は違っても、それぞれの方法でハイレベルな大学や学問に挑戦させることは可能です。

子どもたちに目標ができ、それに挑戦することの楽しみは、それぞれの家族が置かれた環境の中で、いろいろ模索することから始まります。

この本が、そんな家族の楽しみを見つける一助となれば幸いです。

教育は誰からも盗まれることはありませんので、失うことはありません。一生その子に備わっていくものです。

親が子どもに残してあげたい最も貴重な財産だと思えます。